

Title	アーカイブのサステナビリティ安定化とパトロネージ
Sub Title	A patronage for the sustainability stabilization of the archives
Author	山川, 道子(Yamakawa, Michiko)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2019
Jtitle	Booklet Vol.27, (2019.) ,p.78- [90]
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Art and archive 5 図版削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000027-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アーカイブのサステナビリティ安定化と パトロネージ

山川 道子

はじめに

本論は、2018年11月17日に慶應義塾大学アート・センター周年事業 シンポジウム KUAC Art Archive20周年「ジェネティック・エンジン」に登壇した際の内容を加筆・整理したものである。演題は「アーカイヴとパトロネージ」であった。これは事前打ち合わせの中で、現在の日本のアーカイブズが抱える問題を議論して出てきたキーワードだったので、そのまま使用した。企業内でアーカイブ活動と向き合っている立場から、この「パトロネージ」の言葉に込めた考えを述べたいと思う。

1. アーカイブに立ちをはだかる壁

東日本大震災以来、アーカイブの重要性が説かれることが増えたように感じている。記憶は風化し、形あるものは減びるのが世の習いである以上、そこに生きた人々の記録は、意識して残していかないと消えてしまうことに世間が気付いたのだろう。従来、紙やフィルムやテープ——全て形あるものである——で行われてきた記録も、技術の発展によってデジタル化が容易になり、記録方法が多様化したことも一因と言える。国や公的機関のアーカイブ以外に個人のブログ、SNSでの書き込みを保存していくことも、その時を残すという点でアーカイブと言えるだろう。このようにアーカイブは手法も形式も多様化したのが、それを行う側に目を向けてみると、意識的に行う組織は稀であり、その理由の筆頭に挙げられるのは資金不足である。

科研費（科学研究費補助金）などの予算がついたことで、構築されたアーカイブがデータベースとして公開されるが、予算停止と共に消失し、あるいは更新停止した事例は多い。近年のデジタルアーカイブに関係するシンポジウムでは、必ずと言っていいほどにサステナビリティ^{★1}についての話題が出る。つまり、瞬間的な予算が付いたとしても、アーカイブが本来果たすべき役目を維持するには、サステナビリティも意識したアーカイブ活動とはどのようなものなのかを考えねばならないのだ^{★2}。

この観点から現在各所で行われているアーカイブを俯瞰すると、資金以外に

も壁があるように見受けられる^{★3}。次節では資金以外の壁とそれを乗り越えた事例を紹介したい。

2. 予算以外の壁

予算以外の壁とは、例えば、周囲や上司の理解不足の為に予算が下りない、資金はあるが人材不足によって開始が出来ない、そもそも方法論が確立していない、知識の壁などである。にも関わらず、アーカイブ関係者の中には「予算がない」という言葉で思考が止まっている人を多く見かける。今回のキーワードである「パトロネージ」には、お金以外の支援方法にも目を向けて欲しいという考えが入っている。

一度停止したアーカイブが、外部の声で復活した例を挙げる。沖縄平和学習デジタルアーカイブ（平和アーカイブ）である。

沖縄県の事業として2012年度に制作・公開されたこのデジタルアーカイブは、2018年4月に公開を停止し、外部の声に押される形で同年12月に再公開された。このとき中心になったのは、このアーカイブを構築した東京大学の渡邊英徳教授であり、浜る県と交渉をし、その情報をSNSに投稿するなど、マスコミからの取材に応じる形で発信していった。

このとき県が挙げた理由は、Google MapのAPIの停止と、利用実績の少なさだった。前者については、別システムに移行済であることが渡邊氏によって表明され、否定された。かけた費用に比べ利用実績が少なかったというのが実際の理由であろう。

利用実績（アクセス数）が少なく費用対効果が悪いので予算を切る、という判断をされたわけだが、これはすなわち、平和アーカイブにおいては利用実績が予算付与の根拠付けになっていたということであり、アーカイブ関係者の一部が言う「予算がない」事態について、その理由を説明できる例である。

平和アーカイブの復活に当たっては、開発者の渡邊氏が大きな役割を果たした。データのバックアップを取り、APIについての矛盾を指摘し、復活に向けて声を集めることは、氏の経験と知識をもってなしたことである。「アーカイブの停止」という語は定義に幅がある。完全に閉鎖・組織が解散されることを指すのか、それともサーバや組織は残るがアップデートや新規受け入れが止まることを指すのか、データすらなくなった状態を指すのか。平和アーカイブの場合はデータが残っていたため、復活は容易であった。今後アーカイブの停止について議論を行う際には、「停止」の定義について確認し、論者間での共有が必要である。

外部からの声で復活したというのは示唆的である。直接お金を払う以外の応援として、「声」は重要ではないだろうか。ここより先は「声」をキーワードにして論を展開していくことにしよう。

3. アーカイブの誕生 —— I.G アーカイブの事例より

「声」が有効に働いて救われた事例として、筆者がリーダーを勤める I.G アーカイブ^{★4}を紹介したい。

弊社のアーカイブは、2002年に自社の15周年に合わせ、書籍発行とイベントを行う為に社内資料の整理を始めたことがきっかけで生まれた。当時は広報部に所属する部署であったが、上司が必要であると言う資料を、段ボールが山積みになっている倉庫から探し出すのである。立ち上げ間もない2人だけの部署で、時間と根気の必要とされるアーカイブの作業は、より若い入社2年目の筆者の担当となり、昼夜を問わず行わなくてはならなかった。倉庫を片付けながら、出てきたものについて社内スタッフに当時の状況を尋ね、また片付けに戻る。このように常に資料に接していたため、記念事業が終わった頃には、15年分の作品年表が頭の中に刻み込まれた。そこに登場する作品の資料がどこに保管されており、どのような作風をもち、どんなスタッフが関係したのかなどを覚えることができた。

資料が残っている事が社内に知られてくると、作品の製作現場をもつ制作部からも取り出し依頼が来るようになった。問い合わせの内容に対して、資料の有無はその場で答えるか、長くとも15分から30分程度で返答をしていた。現場に信頼されるには、それぐらいのスピード感が必要だったのである。

聞けばすぐに答えが出てくる。物もすぐに用意をする。そうして信頼を得ていった結果、広報部が解散された時に、アーカイブは業務内容を何一つ変えることなく、制作部に移管された。当時の広報部不要論の中で、制作部の制作進行、制作デスク、プロデューサー、アニメーター達が、「アーカイブはあった方が良い。ないと困る」と「声」を上げてくれたおかげで存続が決まった。他部署に理解者を持つことが、組織内での生き残りには必要だと実感した。

4. アーカイブの維持

結論から言えば、アーカイブが所属していた広報部は解散となった。しかし、アーカイブそのものは消滅しなかった。立ち上げ時点からアーカイブ担当は筆者1人であったが、そのまま制作部に所属する1人部署となったのであった。担当者が1人であることで、属人化の問題が発生した^{*5}。これは今日に至るもいまだ十分に解決できていない。というのも、IGアーカイブは2019年4月現在をもって正社員1人であるからだ。実務作業を行う業務委託スタッフが3名いるものの、全員フルタイム勤務ではなく、社員ではないので社内折衝・外部との交渉を行う権限はない。本論註3の「人員不足」「予算不足」に当てはまる。

このことを話題にすると、人を雇い、資料を整理する原資を得る手段としてクラウドファンディングを勧められることが多い。検討はしてみたが、返礼品でつまずいた。返礼品の準備には資金と人手が必要であり、さらに、アニメには多くの著作権者・企業が関わっているので、適切な権利処理をする必要が生じ難しさが増す。責任を負える社員が一人の部署では厳しい。

何をするにもお金は必要だが、そのために現場作業者の時間を奪って資料保存が出来なくなるのは本末転倒だろう。とはいえ実施方法によっては可能だとも思う。本論第5節から7節は、実施するとしたらどうしたらよいのか、考え方や方法論を述べた。

先の例では、部署の費用は、他部署から必要という「声」が上がって維持されることとなった。組織の中では、周囲の声によって状況が変わることがあるため、部署を維持するためのお金の流れと、誰が味方になってくれて、その「声」が誰に届くと効果があるのかを日ごろから気にするとよいだろう。

「声」の力で維持していくことができるようになる、という原理は組織の中だけにとどまらず、一般社会でも有効ではないか。世論を作って味方に付けるのである。

例えば、日ごろから組織外への情報発信を行うことで、SNS等で味方を作ること。これは多くの企業や組織が行っていることであり、有効性が認められている手法である。

情報を受信した側は、応援したいアーカイブや活動があった場合はそれをSNSで発信するであろうし、そうでなくとも覚えていて、誰かと話をしたときや、その組織の関わったものを見たときに思い出して伝えるであろう。それが広まれば発信者に対して有利な空気が醸成されていく。すると、空気が状況を作り出している現代において、金銭補助という、従来考えられていた方法以外のパトロネージが生まれるのである。

いま、パトロネージという言葉述べた。“patronage”を辞書で引けば、後援、保護、奨励、引き立てなどといった意義が現れる。あえてパトロンという語ではなくパトロネージとしたのは、パトロン＝資金提供者のイメージが強いので、それを避けるためである。本論では、資金はもちろん、それ以外の部分での「後援する気持ち」「後援する行為そのもの」をも含めて述べることを企図している。

5. アーカイブに対するパトロネージとは

IGアーカイブの活動が当面属人的な側面から脱する見込みが立たない以上、当人のモチベーションを維持することは重要である。モチベーションを維持するためには環境が整っている（または、直近で整う確証がある）ことが必要であろう。

従来型のパトロンを考えてみると、資金を提供していたことが取り上げられるが、それは単なる表面に現れた行動であって、提供対象者が力を発揮して作業できる環境作りが本質だったのではないだろうか。渋沢栄一を例に取れば、古典籍を収集して青淵文庫を創設する一方、その蔵書を自らの認めた研究者に利用させ、その研究成果の発表場所なども用意した。

ヨーロッパの宮廷画家は、パトロンとなった王族から資金や生活の面倒をってもらう代わりに彼らのために作品を描いた。

お金を出すのは、芸術家なら衣食住、学者の場合なら高価な書籍や器具など、援助対象者が安心して自らの仕事に打ち込める場を提供するためであった。

近現代でもこうしたパトロンはいるが、それと並行して個人からの支援を受ける体制も整備されてきた。例えばアメリカのスミソニアン博物館は、展示物の隣に募金箱を置くことで「これを応援するのだ」という具体的対象を見せ、

来場者の心に訴えかける戦略を取っている。規模は小さいが、日本の国立科学博物館などにも募金箱が置かれている。

大口の個人のパトロンのみの時代から、小口の複数名のパトロネージとの複合・並存へ向かっているのが現代だと考えられる。

さて、ここまでの話を踏まえて現在のアーカイブ組織を省みれば、援助対象者と定義できよう。アーカイブ組織が「安心して自らの仕事に打ち込める」とは、外部からのリアクションを感じて活動が出来る状態となる。企業から経費は支出されており、場所も確保され給与も支給されている状況では、その状態を継続するための説得材料として、外部からのリアクションが必要なのだ。

黙ったままではリアクションはないので、情報発信をすることになる。

発信手段はその時々の活動内容によって異なる。例えば SNS で活動報告を行っているのなら、Facebook ならばシェアボタンが押され、Twitter ならリツイートされ、リプライが返ってくるなどのアクションがあれば、活動内容を認知している人がいることがわかる。興味を持ち、周囲に対して良いアクションを起こす人物は、後援者である。後援者に認知されたというアクションが返ってくることで、予算継続となることもあるのだ。

情報発信を通じ自らの活動を周知することで得られるのは、リアクションと活動を認知する後援者、本論で言うところのパトロネージをする人物である。リアクションは予算継続のための説得材料となり、パトロネージをする人物が現れることで事業の認知は広がり、人とのつながりを得ることもある。(IG アーカイブの事例を言えば、業務委託者の一人との出会いは SNS であり、その人物が本稿執筆の補助を行っている) まずは自らの存在を認知してもらうために「声」を上げていくことが必要であろう。

6. パトロネージ獲得のための手段についての一考察

アーカイブがデータベースや Web サイトで公開された後に、予算削減の対象となるケースがある。多くはアクセス数が少なく、更新頻度が低い場合だ。「利用実績が少なく収集も進まないなら、閉じても誰も文句を言わないだろう」と思われてしまうのだ。第 2 節で触れた、平和アーカイブに対する沖縄県の対応の例が、必要性を訴えるのには利用実績が必要で、そのためにサイトへのアクセス数という指標が有用なことを如実に示している。

アーカイブ存続のためには、どうすればアクセスし利用してもらえるのか考えねばならない。いま、2 つの解を示したい。

一つ目は支援者参加型アーカイブである。非専門家による参加型デジタルアーカイブは、例えば 2010 年に行われた「地域住民参加型デジタルアーカイブの推進に関する調査検討会」事業^{*6}に基づいた「みんなで作る横濱写真アルバム」^{*7}があり、被爆経験の伝承を目的としたヒロシマ・アーカイブの例が報告されている^{*8}。

ここであえて「支援者」を冠して「支援者参加型」としたのは、地域住民参

加型のような不特定多数のボランティアベースではなく、クラウドファンディング支援者へのリターンとして、アーカイブ作業への参加機会を与えることを意図しているからだ。第3節でIGアーカイブはクラウドファンディングを勧められたが、つまづいたと述べたが、その解決にもなりそうである。

例として、公益財団法人松竹大谷図書館^{★9}を挙げる。この施設は毎年1回程度クラウドファンディングで資金調達を行っており、2018年で7回目を迎えた^{★10}。一回限りの資金調達が多くを占めるクラウドファンディングで、毎回目標金額を達しているのである。ここまで継続して成功しているからには、何かしらの仕掛けやノウハウがあると思われる。考察してみたい。

このクラウドファンディングでは、3,000円、5,000円、10,000円、30,000円、50,000円のメニューがあるが、1万円以上の出資で、別途リストで指定される本の中から任意の一冊を選び、保護カバーに出資者の名前を書く返礼がある。これを選択する人が毎回最多であり、現物に自分の名前が入ることを喜ぶ出資者が多いことを物語っているだろう。直接モノに触らなくとも、自分の好きなモノを支援した気分になれるのだ。

これをIGのアーカイブ対象物に即して進めれば、その多くはアニメ制作時の資料^{★11}であって、一般視聴者の目に触れる機会は非常に限られる^{★12}。ファンにとっては垂涎の品であるという強みがある。

この強みがあるからこそ、直接モノを見られる、更には触れられる機会がリターンとして成立する。出資者に現場に手伝いに来てもらう機会を与えることで、お金と人手の両方を確保できる。ただし、未熟練者であることと、盗難や破損防止を講じる必要とから、手伝ってもらうのは単純作業や人海戦術が必要な部分に限り、作業前後に適宜、現物を手に取るなどして見られる時間を作ると良いのではなかろうか。IGアーカイブ側は、返礼のために特別な品物を制作するわけではないので、準備の負担を減らすことにもつながる。

長期的に場所と資金を提供されたとき、それでも足りない瞬間が出てくる。大きな資料群を一気に受け入れたり、新たな業務に手を伸ばそうとしたりするときに、瞬間的に費用と人手が必要になる。クラウドファンディングは、本来こうした瞬間的な費用の調達に向いている仕組みであろう。

さきの松竹大谷図書館も、「【第7弾】世界へ翔んだ、川上音二郎・貞奴の軌跡を未来へ。」(2018年の場合)のように、毎回テーマを決めている。何でもクラウドファンディング、ではなく、目的をしっかりと定めてから使うとより大きな効果が得やすいのだ。

二つ目の手段は、自分が好きな作品に出資をすることが出来るシステムである。大谷図書館の例から考えると、アーカイブは組織が行うが、クラウドファンディングにお金を出す際に自分が好きな作品を選べるというのはどうだろうか。入金者が対象物を決めるケースと、使用者が自由に使える枠があるとなおよい。

先行事例として、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)の手法

が参考になる。寄付金募集案内ページには、宇宙科学分野、通信分野など、あらかじめJAXAがピックアップした領域を選べる他、「用途はJAXAに任せる」という選択肢もあると書かれている^{★13}。

これを応用すれば、アーカイブ支援の新たな形が作れるかも知れない。

IGアーカイブの場合は作品選択ということになる。あらかじめ作品リストを提示して、どれかを選ぶか「どの作品でもよい」とするかを選択できるようにする。

アーカイブ組織間の連携事業としての応用も考えられる。外部資金を求めるアーカイブのリストを公開しておき、出資者には特定の組織を選ぶか、または「どのアーカイブでもよい」という選択肢を設けておくのである。複数のアーカイブ組織がまとめてクラウドファンディングを行う際の方法のひとつになる可能性がある^{★14}。

ここにおいて、IGアーカイブの場合「どの作品でもよい」、アーカイブ間の連携事業の場合「どのアーカイブでもよい」として出資された資金をどうやって分配するのか、その客観性と透明性を保つ必要が出てくる。

一つの案として、作品またはアーカイブ組織のレッドリストを作っておくのはどうか。生物でよく使われるレッドリストと同じ意味で、保管が危なくなっている作品、あるいは組織のリストである。出資側は自分のお金を出すもよし、専門技能や専門知識を貸すもよし、場合によっては保管出来そうなアーカイブ施設・組織（美術館や博物館や公文書館）が名乗りを上げることもできるだろう。

こうした試みは賛否両論であろう。批判も出てくると思われるが、いずれにしてもアーカイブズ自体を世の中に知ってもらうことになるので広報活動に繋がりが、資料を残したい人たちの味方を作ることが出来ると考えている。

まずは存在を知ってもらうこと。そのためには間口は広くし、細かい知識がなくとも入ってこられることを重視するのがいいだろう。そのためには、時には、長年のファン、深い知識を持つファンで、その年数や深い知識を笠に着て近年興味を持ったファンを馬鹿にするような行為^{★15}をする人物を断る必要があるだろう。

活動が目につくようになると、マスコミが取り上げるようになる。最初はニュース番組や新聞記事、更に一般化すればバラエティやドラマなどに登場することもあろう。大きな広告効果をもたらすマスコミとの良好な関係を築くのは、広報の上で非常に重要な仕事である。

ここで述べた手段は、両方ともクラウドファンディングの使い方について考察したものだ。瞬間的な費用調達に優れたクラウドファンディングの仕組みは、うまく使いこなすと継続的な資金調達となる可能性もある。ただし得られる金額は安定しないため、クラウドで調達した資金のみで運営するのはリスクが大きい。他に安定した資金調達手段を持つことができるならば、それにプラスすることで新たな試みをしたり、収蔵品の幅を広げたりする余裕が生まれるのだ。

7. コレクターコミュニティの成熟

しばしばアーカイブと混同されるのが、コレクション／コレクターである。アーカイブは、目的の分野についての資料を広く保存・収集する組織であり、コレクターは自らの趣味嗜好に基づいて資料を取捨選択し収集する個人という差がある。コレクターの収集物をコレクションと呼ぶ。

どんな分野にも一定のコレクターがいてコレクションがある。アニメで言うならセル画のコレクター（コレクション、以下同様）、グッズのコレクター、声優関連のコレクター、特定のシリーズや制作会社に特化したコレクターなど、およそ思いつく限りのあらゆるコレクターがいてコレクションが存在すると言てよい。

コレクターは収集対象に興味を持って活動していることから、アーカイブに対しては、現物の提供、情報提供、維持に対する支援など、パトロネージになってくれることが期待出来る。

コレクター同士は多くコミュニティを作り、情報交換をする傾向がある。そこで新たなものが見つかったり証言が得られたりすることもある。アニメーションの場合、コレクターは、彼らの言うところの「公式」（制作サイドのこと）に友好的なことが多いので、アーカイブ担当者が見落としていた情報や現物もたらされることがある。

ゆえに、コレクターコミュニティの成熟はアーカイブの存在にとっても良い効果がある。その成熟を共有するために、コレクターとアーカイブのより密接な交流が必要である。

時折、コレクターのコレクションを保管できれば、その分野のアーカイブが完成するとの話を見聞きすることがある。対象物を収集する際に、アーカイブは自組織の方針に基づいて個人の主観を除き、入手すべきか否かを判断する。一方コレクターは個人であり、自身の主観に基づいて、入手すべきか否かを判断する。両者は質が異なるのだ。

質の違いについて、アニメを例にとって述べる。30分のアニメーションを作るためには約5,000枚の絵（動画）を描く必要がある。5,000枚の動画のうちには、キャラクターの決めポーズのように一枚絵として見ても美しいものもあれば（図1）、口の動きだけ、足の動きだけのように、それだけ取り出しても一般的には鑑賞対象とみなされないようなものもある（図2）。コレクターが、その内の1枚だけを、飾るのに向いている絵だからと判断して残したとする。そうして額縁に入れやすい絵だけのコレクションが出来上がる。

アニメ制作で描かれる絵は、一枚を取り出して鑑賞することを意識していない。あくまでそのシーンの動きの中で、前後の動きと矛盾なく見られるように描いていく。そのための技法は一枚絵の技法とは異なることが多い。ゆえに、一枚で鑑賞することが出来る絵が存在したとしても、それはある意味、偶然の結果に過ぎない。一枚を取り出すことは、こうした前後のつながりを断ち切ることである（図3）。

以上の2例をもってアニメ分野のアーカイブであるとなると、アニメーション

ンの絵には額に収まるような内容しか無いと誤解されるだろう。動画はあくまでアニメーション作品の制作工程で描かれる一枚の絵であって、作品を構成する5,000枚の中に納まってはじめてその真価を発揮するのだ。「飾るのに向いているから」と1枚のみを取り出すことは、作品の文脈を無視した行為に他ならない。

こうした齟齬はコレクターの構築したコレクションにしばしば見られる傾向である。

ゆえに、質的に違うものをアーカイブとして同列に扱う考えには大きな違和感を覚える。もちろん、アーカイブの資料収集の一環として個人の考えや活動記録を含めて残す事には賛成であるし、収集方針に合致すればコレクションの受け入れを行うことも考えられる。その際には、誤解を避ける為にコレクターの意図を明記する事が重要である。

筆者は、コレクションもしっかりと残しつつ、コレクターが興味を持つ持たないにかかわらず、その分野を形成する資料群を残す事が、結果としては多くの興味を惹くアーカイブが可能になると考えている。

今、IGアーカイブと同様にアニメ資料を収集している組織としては、特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構(ATAC)が代表的だ^{*16}。ATACは、個人コレクターからの寄贈資料を中心に成り立っている独立組織である。

IGアーカイブは社内組織ゆえ、企業の枠を超えて収集していくことはできないが、さまざまな理由で外部に出せない資料を保存することが出来る。一方、独立した存在であるATACは、特定の企業にとらわれることなく資料収集が可能であるが、製作側企業が社外に出さない資料の保存は出来ない。

同じアニメ資料を収集対照として掲げながらも、運営方針も組織もまったく異なる組織が存在することは、多様性を広げるし、それぞれが得意なことを補完することもできるだろう。今後も動向に注目し、協力関係を築いていけることを望んでいる。

資金面から見ると、IGアーカイブは会社から運営資金が出ているが、ATACは自ら資金を生み出さねばならない。そのために寄付を募っている。アーカイブにおいてサステナビリティを考えると、例えば企業や国など、安定した大きな資金を持つ組織に協力してもらうことが考えられる。安定はコレクションを預け、あるいは寄贈するコレクターにとっては、組織がこの先も存続していこうという安心につながり、安心はより一層収集を進めることにつながるだろう。この点は第5節末で述べたこととつながる。

8. パトロネージの心に寄り添った入口作り

前節の最後に、サステナビリティの視点から運用資金調達について触れた。全体を維持するための下支えになるような費用と場所が確保できると、支援者が必要になる。その意義と獲得方法、獲得資金の用途などについては、5章で述べた。ここでは「後援する気持ち」「後援する行為そのもの」をもつ人物、すなわちパトロネージする側のことを考えてみる。

まず、パトロネージする人物像を想定してみよう。資金や労力を提供できるのは、まず自分の生活を維持できてからになるので、生活に一定以上の余裕があるだろう。パトロネージしたい分野に関心があるのも条件となろう。

こうした人物像を想定すると、パトロネージする人物に合わせた展開を考えていくことが必要だと思われる。従来支援してくれていた人物に継続支援を求めるのか、新規支援者を獲得していくのかというのが第一段階だ。資金が欲しいという「声」を、どの層に届けるか考えねばならない、と言い換えることが出来るだろう。

株式会社ヴァリユーズが2018年7月に発表した統計^{★17}には、Makuake・CAMPFIRE・Readyfor・GREEN FUNDING・Motion Gallery という代表的な5つのクラウドファンディングサイトのユーザ新規率が掲載されている。これを見ると、サイトによるばらつきが大きいことがわかる。従来のパトロネージする人物に焦点を当てて継続した支援を狙うのか、新規パトロネージの獲得に向けてアプローチしていくのかによって、サイトを使い分けるのが良いのではないか。

加えて、日本のアニメーションは海外のファンや海外のコレクターが多い。海外に目を向ければKickstarter、Indiegogoなど国内を上回る規模を持つサイトがある。本論で参照した統計は国内大手のみであるが、国外サイトの統計も見た上で、最も適切な相手を選んで連携することを視野に入れる必要もあるだろう。

第6節で述べたコレクターとの連携は、ここで生きてくる。国内外を問わず、どのようなアプローチをすれば興味関心を持つ層にアピールできるのか、参考意見を求めることが出来るからだ。

クラウドファンディングは比較的小額の支援を多くから集める仕組みだが、大口の支援もありがたいものだ。支援される側が上げた「声」を潜在的支援者が見つけて支援対象までたどり着けるように、効果的な媒体や手法を検討し、さまざまな入口を作っておくことも考えねばならない。

9. 支援を受ける側の心構え

さて、このようにパトロネージする層の人物像を描き、アプローチの方法を考えたところで、支援を受ける側に視点を戻そう。

アーカイブ担当者が支援を求めて「声」を上げたとき、まず立ち現れるのが非難と批判だ。非難は根拠なき罵詈雑言、批判は主張を持っているものだ。これらに晒されたとき、人の感情は不安定になる。アニメの場合は、資料保存よりもまずクリエイターの待遇改善を、という批判があるし、アニメは趣味のもの・子供が見るものだからというステレオタイプな偏見、お金を持つものに対するやっかみに根ざした非難が強い言葉で浴びせられる。その中でも折れず、「守るべき資料を守る」という目的を貫く覚悟が求められるだろう。

とはいえ、一人で強い言葉に耐えるのは限界がある。そこで、アーカイブ担当者、あるいはアーカイブ組織同士の横のつながりが必要だ。自分のところで

は初めての事例でも、他では既に出会っていたという場合もあるだろう。つながりによって情報交換できれば、対処法を参照できる。もちろんその逆も考えられる。組織を横断した情報交換の仕組みは図書館では既に実現している。レファレンス共同データベースとして、利用者からの問い合わせとその回答を全国規模で収集して提供するサービスがそれであるが、参考になるだろう。

組織横断型情報交換を支えることができる組織を作れないものだろうか。新規でも既存の組織でも良い。情報とつながりを求める人が集まる場を作ることが出来れば、目的意識は同じなので交流が生まれることが期待できる。「声」を掛けあった人や組織がそこで情報交換や人脈作りをすることによって、草の根的に横のつながりが出来ていく。筆者の経験では、学会の会場や懇親会で横のつながりが出来たことがある。アーカイブ活動における情報交換の場や組織が必要だという「声」はしばしばアーカイブ組織や担当者といった、アーカイブに関わる内部から上がるが、実現のためには外部の専門家や資金、あるいは内部の「声」を汲み取って外部に拡散する支援者は不可欠だ。

アーカイブ側からは、いかに有用かを訴える「声」を上げ続けること。それを受けた人たちがパトネージし、それによってアーカイブが存続し、さらに「声」を上げていく。アーカイブ担当者は「声」を掛けあって横のつながりを作っていく。循環する仕組みをうまく作り上げていくことが求められているのではなかろうか。

最後に、本論の執筆に当たっては、金木利憲氏の多大なる支援を得た。ここに記して感謝したい。

(やまかわ みちこ・株式会社 プロダクション・アイジー
アーカイブグループ リーダー)

註

☆1——ここでは持続可能性を指す。

☆2——デジタルアーカイブ学会第3回大会において「アーカイブの継承」というセッションが組まれた(2019年3月16日)ことは、サステナビリティの問題を、デジタルアーカイブに関わる当事者も重大な問題として認識していることを示す例だろう。

☆3——註2で挙げたセッションにおいて、小村愛美氏は、デジタルアーカイブの存在と運営の課題として「予算不足、著作権処理手順が未確定であること、人員不足、データ標準化方針が未策定であること」を挙げた。

☆4——アニメーション制作会社であるプロダクションIGの社内部署。

☆5——先に述べた作品年表や保管場所の把握、関わったスタッフの名前などは、ある程度Excel表や文書に記したものの、根源的な部分は担当者の頭の中であり、担当者そのものがデータベースと検索システムの実態となっている。

☆6——総務省関東総合通信局情報通信連携推進課『地域住民参加型デジタルアーカイブの推進に関する調査検討会報告書』2010年3月

http://www.soumu.go.jp/soutsu/kanto/stats/data/chosa/chosa21_1.pdf (2019年4月7日閲覧)

☆7——<http://www.yokohama-album.jp/> (2019年4月7日閲覧)

- ☆8——田村賢哉、秦那実、井上洋希、渡邊英徳「ヒロシマ・アーカイブにおける非専門家による参加型デジタルアーカイブズの構築」『デジタルアーカイブ学会誌』2-4、2018年
- ☆9——<https://www.shochiku.co.jp/shochiku-otani-toshokan/> 映画会社の松竹が収集した資料を公開する、演劇と映画に特化した専門図書館である。(2019/13/2019年4月3日閲覧)
- ☆10——<https://readyfor.jp/projects/ootanitoshokan7/announcements/84944> 第7弾のクラウドファンディングサイト。(2019年4月3日閲覧)
- ☆11——絵コンテや原画・動画・セル画といった形のある資料、サーバ上のデータといった形を持たない資料がある。ここでは形のある資料を想定しておく。
- ☆12——複製物は、設定資料として専門雑誌やその他書籍に掲載されたり、複製原画として販売されることがあるが、オリジナルは展示会などに出品したり、雑誌掲載や書籍編集のために貸し出す他は外部に出ることはほとんどない。
- ☆13——http://www.jaxa.jp/about/donations/index_j.html JAXAの寄付金についてのページ (2019年4月3日閲覧)
- ☆14——各組織ごとに必要な上限金額を設定しておき、そこを超えた分は他組織に回すという規定を作っておくと、集金力のあるコンテンツを持つアーカイブに参加してもらい、そうではないアーカイブの広告と支援につなげるという手法が取れるのではないか。
- ☆15——かつては新参いじめなどといわれたが、近年はマウンティングと呼ばれる行為である。
- ☆16——<http://atac.or.jp/> ATACの公式サイト (2019年4月3日閲覧)
- ☆17——話題のクラウドファンディングを徹底分析 <https://www.valuesccg.com/knowledge/report/marketing/047/> (2019年4月3日閲覧)



「シンポジウム『ジェネティック・エンジン』」(2018年11月17日開催)より